

図書館報



★ 第65号
★ 兵庫県立三木東高等学校 総務部 発行

「もつともつと本を読もう」

「本を読もう。もつと本を読もう。もつともつと本を読もう。」これは、長田弘さんの詩「世界は1冊の本」の冒頭の一節である。

幼い頃、農業と繊維産業が地域を支え、大きな書店もない町に育った私は、本に魅力を感じる機会もなければ、本に積極的に関わろうとすることもなかった。バスとJRを乗り継ぎ、片道1時間半かけて通った高校時代も、行きは毎朝の英単語・古語の小テスト対策、帰りは疲れて眠る毎日で、「本を読めば、視野が広がる」と言われても、本に目を向ける心の余裕も芽生えなかった。高校時代の夏休み、友人とともに上の丸公園にあった三木市立図書館（現・みき歴史資料館）にもよく通ったが、その目的はもっぱら受験勉強で、館内に並ぶ書籍に触れた記憶もほとんどない。

こんな私が本に触れるようになったのは、大学に入ってから

である。「〇〇について論じなさい」といった試験やレポートでは、ひたすら書きまとめなければならなかった。「寿限無じゅげむ」の暗唱や、物事を暗記するのは得意なほうだったが、無地の用紙を両面埋め尽くすだけの知識もなければ、さまざまに知識を整理し文章を組み立てるといったことが苦手なことを痛感する日々だった。当時流行した歌のごとく「何から伝えればいいのか、分からないまま時は流れる」ことも多く、持っている知識をうまくアウトプットできない自分にもどかしさを覚えた。

同じ頃、日本ではバブル経済が崩壊し、世界でも後の政治・経済に大きな変化をもたらす出来事が次々と起こった。暗記した歴史上の個々の出来事は知っていても、何が原因となって何が起こり、そしてこれからどうなっていくのか、さっぱり意味が分からなかった。だから、新たな知識を手に入れて世の中をもっと理解し、しかも自分の言葉で説明できるようになりたかった。このような経緯から、自

身でたどりついた答えがあった。「もつと本を読もう」。

今の社会は「情報化社会」「知識基盤社会」ともいわれ、情報が価値を持ち、情報そのものを使いこなす力や情報を活用する力が注目され、これらの力を有する者が、より豊かで便利な生活を歩むことができるとされる。また、今の社会は、将来の予測がしにくく、既存の価値観やビジネスモデルだけでは通用しない、VUCA（ブーカ）の時代ともいわれる。銀行の預金金利も、昭和末期から平成初期の頃にケタ違いに下がり、いまや利息で生計を営むことなど、ありえない。とはいえ、NISAなど教わったことのない分野に容易に足を踏み出せない人々も多々いる。数年前から小学校でプログラミング教育が導入されたが、教わった経験がないから教え方がわからないと戸惑う先生もいる。しかし、学生時代にどれだけ多くのことを学んでも、その知識だけで一生暮らしていけるはずはない。これは、すべての人に言えることである。

福沢諭吉は、著書「学問のす

すめ」で実学の重要性を広めた。皆さんは実学とともに、教養を深められる本校の環境で学んでいる。実学を学ぶほど、国語や数学などをはじめとする教養を学ぶことや本を読むことが、自分の礎となることに気づく。まして、ネットでの情報検索や生成AIとの対話が、自分の礎をさらに強固なものにする。

日本の平均寿命から逆算すれば、皆さんの人生は先にまだ70年ほどある。人生を1冊の本に例えるなら、皆さんはまだこの本を1/4も読んでいない。これからの3/4が楽しみだ。自分の視野を広げ、自分と大切な人が幸福で豊かな生活を送るためにも「もつともつと本を読もう」。おそらく、私自身の1冊の本の半分以上を読んだ私でも、これから先が楽しみである。

「居場所」

「先生、うちのSが学校に来てません！家に連絡してもつながらなくて・・・」担任から報告があり、学年の先生を中心に市内に捜索に出かけた。

普段口数が少なく、漫画家になりたい夢を持つSは、工業科独特の男子のノリに合いくく、週明けの苛烈な実習レポートも滞りがちだった。Sとは授業でよく本の話をしていたので、近隣の商業施設を見回る学年には「市の図書館も見に行つて」とお願いした。私はSの自宅から商業施設を見回つたが、そこに担任が「Sが見つかりました。図書館にいました！」息を弾ませて走り寄つてきた。

放課後、担任と一緒に来たSとしばらく顔を見合わせ、「心配かけてすみませんでした」と話してくれた時、叱つたり指導したりする言葉よりも、「読書」「図書館」という言葉で繋がった共感を覚えたことが印象に残った。図書館は様々な目的を持った

人たちが利用する場所だが、他者の利用を尊重できるからこそ誰にとっても大切な「居場所」になるのだろう。本校図書館もそんな素敵な場所でありますように。



「本がくれたもの」

普段は一冊をなかなか最後まで読み切れず、ずっとカバンの中で眠らせてしまっている私だが、本屋や図書館に足を踏み入れると一転して「スイッチ」が入る。今話題の本、おススメの本、何かの大賞を取った本などをペラペラしているだけでワクワク感が止まらなくなる。そこには自分の知らない世界の扉がいくつもあって、どの扉を開けようとも決して誰にも邪魔をされることはない。そして、自分と相性のいいものに出会うと、高揚感が手伝つて一気に最後まで読めてしまう。不思議な場所だ。

子どもの頃はよく図書館に通っていた。絵本や挿絵がいっぱい入っている本が好きだった。特にサンタクロースに興味があった幼児期は、サンタの物語を読みあさつたような記憶がある。読めば読むほど謎に包まれていくサンタ。もう少し知りたいと思いつた本へ。また次の本へ。

複数回繰り返しいろいろな本に出会うことになるが、そこで物事には様々な視点があることに気づかされた。子どもからの視点、親からの視点、周囲の視点、時には動物目線。

結局、サンタって？という疑問を抱えたまま幼児期を終えたが、重要なのは存在するかどうかとかではないことがわかった。大切な人をもつての愛、とか、何かを無邪気に信じようとする透明さ、とか、人を幸せにしたいと願う心の豊かさを感じた時、私の心に何とも言えない感動が「後味」となって残っている。それは今でも本で培ったかけがえのない宝物になっている。

本って素晴らしい。ネット社会に飲み込まれていく世の中になつてきているが、生の本を手に入れる場所は無くさないでほしい。

「星新一 ショートショート」

私が将来について真剣に考えたのは、野球部を引退し、受験勉強に励む高校三年生の時でした。私は高校には野球をしようとしていたといっても過言ではなかったのです。高校三年の夏休みは、挽回するための勝負の期間であり、勉強に集中する必要があります。そんな中で星新一のショートショートと出会いました。特に現実と非現実の境界線が曖昧な作品に魅了されました。星新一の作品は、アイデアが斬新で、予測不可能な展開が多いです。しばしば時間や空間が転換したり、SF要素とファンタジーの要素をコミカルに組み合わせ新しい世界を作り出したりします。時に笑いと驚きを絶妙に組み合わせユーモアや心温まるエピソードで私をはじめ読者の心を打ちます。このような日常の中に潜む不思議やファンタジーが受験勉強の合間にほんのりとした楽しみを提供してくれました。また、独特のス

トリー展開と想像力で深い考察に導いてくれる作品にも魅了されました。圧倒的に緻密な登場人物の心理描写で、彼らの葛藤に容易に感情移入できます。

その上で、社会的な風刺がちりばめられていたり、背後に深い哲学的なテーマや人間の本质についての考察が隠れていたりします。1つの物語から得られる教訓や考えるきっかけも多く、奥深いメッセージの凝縮は、今思えば、私の思考力を鍛えることにもなっていたように感じます。

ショートショートは、勉強の合間のリフレッシュや、物事を別の視点から見ると様々な世界を広げてくれました。受験勉強が忙しい日々でも、星新一の作品を楽しむことは、私が成長する過程で大切な一部となりました。教員となった今でも、星新一の作品は私の心にゆとりを与え、感性や思考力を語りかけてくれる存在です。

「本との出会い」

私は小学生のころから高校を卒業するまで、本を読むほうではなかった。言ってしまうと、私は読書が嫌いだった。小学生の時、夏休みの課題として出された読書感想文は、本を読むの一日に二、三ページが限界の私にとって本当に苦痛だった。夏休みの終わりに両親に急かさず、泣きながら感想文を書いた記憶もある。

そんな私が運命の本と出会ったのは大学一年生の時。フランス文学を専攻していたので、フランス作家の本を読み、その本について発表する課題が授業で出された。その時は、「めんどくさい」と思っていた。翌日、書店でどの本を読もうか迷っていると、表紙が一際目立つものがあった。目立っているからという理由で、あらずじも読まず、その本を読むことに決めた。読み始めはやはり苦痛で、一章を読み終えるのに一週間もかかった。そして、何日も

かけて読み進めていくと、どんな物語の世界に引き込まれていくのを感じた。私にとって初めての感覚だった。授業での発表もうまくいって、自分と違う本の解釈をし、別の考え方を持っている友人との意見交換はすごく楽しかった。

この時から、私はフランス文学にのめりこむようになった。本は私を非日常な世界や未経験の時代へと誘ってくれる。教員採用試験の勉強に行き詰まった時には、息抜きに読書をしたり、大学の図書館に一日中こもって大好きな作家の本を読み漁ったりもした。現実から目を背け、別の世界に没入できたからこそ読書を終えてまた勉強を始めた時はスツキリとした気持ちで取り組むことができた。最近はその時間が取れず本を読むことが少なくなってきたが、読書が嫌いとは思わなくなった。時間があれば、また別のフランス文学を読みたいと思う。

過去の私のように本を読むことが苦手な人もいるだろう。しかし、まずは書店や図書室に行つて本を眺めることから始めて

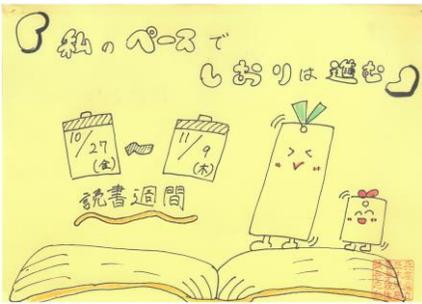
みてほしい。必ず目を引く本があるはずだ。その本があなたにとつて運命の本になるかもしれない。

『椿姫』（デュマ・フィス著・新庄 嘉章訳・新潮社）

②



③



「私を救ってくれた本」

今から三年前に、私は一冊の本に出会った。

その本は、『七つの習慣』という題名の、いわゆる自己啓発本である。大学生のころから趣味で、よく本を読んでいたが、自己啓発本に関しては、「少し胡散臭いな」と敬遠していた節があった。しかし、三年前に読んだ『七つの習慣』は、私の心を大きく動かし、今の私を形作る、人生のバイブル本となっている。なぜこんなに本書に響いたのか、考察してみたいと思う。

今から三年前、私は小学校の教師を辞めた。

高校時代から志していたが、自分の理想と現実のギャップに対応できず苦しかった一年だった。そして、将来に対して希望を見いだせず、自己肯定感が著しく低い状態だった。

そんな中、ふと近所の本屋で出会ったのが本書だった。五〇ページ以上ある重厚な本だが、スルスルと引き込まれるように

読み進めていった。この本には「人生をよりよく生きるにはどうするべきなのか」が七つの習慣として、まとめられている。

本書の結論として自分の考えをまとめると「誠実に生きよ」「他者に振り回されず、自分の芯をもって生きよ」ということを学んだ。そのために、日々具体的にどんなことをするのかということも、紙にまとめて、部屋に掲示している。

つまり、なぜこんなに響いたのかというと、苦しい状態の中で、「自分事」として本と向き合えたからである。この本を実践し出してからは、日々充実しており、もちろん苦しくなることもあるが、自分の原点に立ち返ることができるようになった。

こうした経験から、読書とは、人生に悩んだり苦しんだりした時にこそ、するべきであると考える。多くの人が、日々変化し、社会に対して不安を抱える今の時代だからこそ、そうした不安から救ってくれる、運命的な本との出会いがあることを強く願う。

「新しい出会い」

みなさんは、本を読みますか。私は読書が嫌いだったわけではありませんが、高校まで部活漬けだったので自分から本を読む気力はありませんでした。

そんな私が積極的に読書を始めたのは、大学受験が終わって少し余裕ができた時期でした。高校の図書室の小説などを読み、大学に入ってからジャンルを問わずいろいろな本を読みました。

いろいろな本を読んでも、今まで読むことのなかった恋愛小説や、ミステリー小説などを意外と楽しんでいたり、自分の知らない分野の専門書が思いのほか面白かったりしました。本を読むことで新しい知識を得るだけでなく、いろいろな影響を私は受けました。本を読む時間というのは、変化していく自分と向き合い、新しい一面を発見する時間だと私は思います。だからこそ、みなさんにもいろいろな本を読んでもらいたいと思

います。

自分がどんなジャンルの本が好きなのか判らない人、そもそも本をあまり読まない人も、まずは本を手にとってみましょう。途中まで読んで合わなかったら止めてしまっても構いませんが、最後まで読んでみると意外と面白かったなんてこともありそうです。たくさんの本に触れることで自分の好きなジャンルがわかるでしょう。もしかしたら、思いがけないジャンルを好きになるかもしれません。みなさんにも、そんな本とのすばらしい出会いがあることを願っています。

④



「図書館へ行く」

みなさんは、本を読んでいいますか？

私は本をあまり読んでいません。どちらかと言うと、本を読む時間があれば体を動かしたいタイプです。ゴルフをしている時など、体を動かしているとき合っていると思います。

だから、みなさんにお勧めしたい本も無いのですが、定期的な届く新聞を読んでそれが図書館の廊下に並んでいるのでお勧めしたいです。

株式会社大島さまより、朝日新聞発行の朝日ウィークリーを寄贈していただいています。生徒の勉強になるように英字と日本語が並んでいたり、注釈を加えて英字のみで記事が書かれていたりします。

表紙にある大きな写真には今話題のスポーツ選手などが登場するので、毎回表紙の写真を見るのも記事を読むのも楽しみです。

⑤



この原稿を書くにあたり、図書館を想像しています。静かな空間でその新聞をゆっくり開いてみたくなかったので、図書館へ行ってみたいな、思っています。



- ⑩
3
の
2
- ⑨
3
の
1
- ⑧
3
の
3
- ⑦
3
の
4
- ⑥
1
の
1
- ⑤
3
の
5
- ④
3
の
1
- ③
3
の
4
- ②
1
の
1
- ①
3
の
5



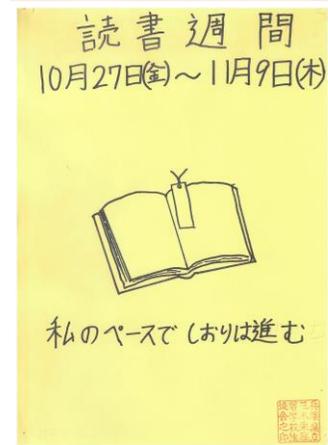
⑧



⑦



⑩



⑨

編集後記

この図書館報は、昭和五十五（一九八〇）年六月一日に創刊し、今年で四十四年目を迎えました。

毎年、新着任の先生方に原稿をお願いし、図書館報をつくっています。今年度は八名の先生方に執筆していただきました。今年度も先生方のご協力のおかげで無事に図書館報を発行することができました。興味深い内容ばかりですので一読いただきたいと思います。それでは、新着任の先生方の寄稿をお楽しみください。

一学期は勉強をする場、読書の場として活用していただきました。「また行きたいと思える図書館」を目標に、引き続き図書委員と活動を続けていきます。毎月発行の Library も「楽しみにしています」というお声をいただきます。ありがとうございます。最後に、ご多忙中、原稿執筆していただいた先生方、本当にありがとうございます。心より感謝申し上げます。